

コメディリック第5回「貧乏放し飼い」

「諦めたらそこで試合終了」

登場人物

タチバナ

ペイリー・チャイルド

ジョージ

野彦

ダイモン

シロスコフ

※タチバナ、ジョージ、板付き

【L・明転】

ジョージ 「まあ、諦めたらそこで試合終了ですもんねー」

ジョージをガンガン蹴りながら怒り始めるタチバナ

タチバナ 「てめえ！こら！こら！おい！おい！」

ジョージ 「なんすか！なんすか！」

タチバナ 「今何だった」

ジョージ 「いや『諦めたらそこで試合終了ですもんね』」

再びジョージをガンガン蹴り始めるタチバナ

ジョージ 「やめてください！やめてください！どうしたんですか！」

タチバナ 「お前、そのセリフ『大して興味がない話を相手にされた時に使う締め言葉』だろ？」

ジョージ 「え」

タチバナ 「『どうしよー対して言う事浮かばねー』って時に使う言葉だろ？」

ジョージ 「それは…」

タチバナ 「凶星だろうが！（ガンガン蹴る）」

ジョージ 「やめてください！すいません！すいません！」

タチバナ 「分かんだよそういうの。いっぱいそうやって使う奴いるからな…」

ジョージ 「スラムダンク好きじゃないんすか？」

タチバナ 「この街の人間は全員、スラムダンクを愛してるよ。なんで分かるか？」

ジョージ 「最高だからっすか？」

タチバナ 「娯楽が少ねーからだよ。聞き飽きてんだよ。二度と使うなよ『諦めたらそこで試合終了』って」

ジョージ 「はい…」

タチバナ 「舐めやがって…しかも『俺の嫁が弟と不倫してる話』の締めに使いやがって」

ジョージ 「すいません…」

タチバナ 「冷たい奴だよ。気をつけるよ？気づく奴は気づくからな」

※ダイモン、登場

ダイモン、泣きながら二人の元へ来る

タチバナ 「ダイモン。どうした？」

すすり泣くダイモン

ジョージ 「兄貴、何があつたんですか？」
ダイモン 「…借金の取り立て先の家のドアを蹴り

破つたら…中に…ガキの頃、世話になつた恩師が変わり果てた姿でヤク中になつてた…。俺は取り立て所じやなくなつて

「先生、先生」って呼び掛けたけど俺に一向に気づく気配もねえ。「ごめんない。ごめんない」としか言わねえんだよ…俺は…俺はどうすればいいかわかんなくなつちまつて…」

ジョージ 「…諦めたらそこで試合終了ですもんね」

タチバナ 「ちよ、ちよ、ちよ（ジョージを止めて）絶対ダメじゃん。何やってんの」

ジョージ 「すいません、つい…リアクションとして癖ついて…」

タチバナ 「え、何にも思わなかった？結構悲しい話だぞ」

ジョージ 「自分の中ではまだ「諦めたらそこで試合終了」レベルで…」

タチバナ 「お前は本当に冷たい人間だな」

ひと際大きく泣き始める中川

タチバナ 「あーよしよし」

ジョージ 「それでどうしたんですか？」
ダイモン 「…俺は放っておけなくて、うちに連れて帰つたんだ。ロクなもん食つてねえだろうと思つて、すぐにパンとスープを出した。先生は俺から奪い取るようにパンを食べ始めた。でも歯が全部抜け落ちて、パンがうまく噛めねえんだよ。次第に先生はパンを喰うのを諦めてスープだけ飲んで寝た。先生は眠りながら泣いてたよ…それ見たら…俺は…俺は…」

ジョージ 「諦めたらそこで試合終了ですもんね」
タチバナ 「マジで！？（ジョージを止めて）おい！マジか！？かなりくる話だよ？どんなに腹が減つてもパンが食えない話だよ？」

ジョージ 「返しとしてはギリ間違つてないですよ？諦めたからパンが食えないっていう話で」

タチバナ 「お前には道徳心つてものがないのか？」

ジョージ 「難しいんですよ。なんて返せばいいか

：『諦そこ』しか思いつかない」

タチバナ 「『諦そこ』つてなんだよ」

ひと際大きく泣き始める中川

タチバナ 「あーよしよし」

ジョージ 「まだありますか？」

ダイモン

「それから俺は先生を匿って面倒を見て、飯を食わせて、漏らした糞を片付けて、体を拭いたよ。先生の体は俺にゲンコツ喰らわせてたあの頃とは別人みたいにやせ細ってたよ。気を抜くとただの薄汚ねえオヤジに見えた。そうしてる内に俺が先生を匿っていることが組織にばれた。先生の借金はとても俺が肩代わりできる額じゃねえ。俺は組織から命令された。先生を始末しろと」

泣き出すジョージ

ジョージ 「(泣きながら) 諦めたらそこで試合終

了ですもんね…」

タチバナ 「どういう感情？」

ジョージ 「もうこの返しが体に刻みこまれてる」

タチバナ 「マシーンだな！ 諦めたらそこで試合終了マシーン」

了マシーン」

ダイモン

「俺は決心してその日は寝た。次の日、先生との最後の朝飯を用意した。でもそんなもん喉を通るわけがねえ。一口もかじらずにパンをゴミ箱に捨てたよ。そしてたらよう。先生が。先生が俺にゲンコツしたんだよ。力ない拳でゲンコツをした。そして俺に「食い物を粗末にする奴を俺は許さねえぞ」って言ったんだ。先生だった。あの人は薬漬けでラリッても、俺の前では先生だったんだよ。俺は泣きながら、ピストルを先生に構えたよ。今のうちに。先生が先生でいるうちに俺の手で天国に送ってやろうと思ったんだ。でも涙で上手く狙いが定まらねえ。すると揺れる銃口を突然、先生が握りしめて、自分の頭に押し当てたんだ。そして。先生は俺にこう言った。」

タチバナ 「え。まさか…」

ダイモン

「『こんな時、どんな顔すればいいかわからないの』つて」

タチバナ 「え」

ダイモン 「俺は『笑えばいいと思うよ』って言った。そしたらよう、先生が両手で俺の頬を掴んで、いきなりキスしてきたんだよ。じっくり舌をねじ込んできた後に『…大人のキスよ。帰ったら続きをしましょ…』つつつたんだ。俺はそのままピストルをぶっ放した」

間

ひと際大きく泣くダイモン

ダイモン 「これが俺のファーストキスだよ。俺は恥ずかしい話、今まで誰ともキスしたことが無かった。一番、最初は本当に好きになつた人として決めてたんだよ…それが…これ…初めてが…こんな…こんな…ヤク中のおっさんとキスすることになるなんて…こんなことがあっていいのかよお！俺はこの先、どうやって生きていけばいいんだよ…」

ジョージ 「…諦めたらそこで試合終了ですよ」

タチバナ 「うん。諦めたらそこで試合終了だよ」

ダイモン 「ちくしょー！」

【し・暗転】

—了—